

# 貝原篤信(益軒)『大和本草』の石斛

夏井 高人

## 1 はじめに

日本国の本草書として最も古いものは、『本草和名』<sup>1</sup>だとされている。

『本草和名』の第六巻・草上には石斛の記述がある。そこでは、石斛の別名(一名)を「林蘭」とした上で、「石斛者山精也」、「又石精也」と説明し、加えて、石斛の和名について「須久奈比古久須祢<sup>2</sup>」とし、その別名(一名)を「波久須利<sup>3</sup>」としている。

『本草和名』は、醍醐天皇の代の侍医(権医博士)だった深根輔仁(深江輔仁・生没年不詳)<sup>4</sup>が延喜年間(西暦901年～923年)に編纂したもので、『薬経太素』に基づき、これに和名を付したものと理解されている。この『薬経太素』は、中国唐代に編纂された『新修本草』<sup>5</sup>を手本として、和気広世(生没年不詳)<sup>6</sup>が延暦18年(西暦799年)ころに編纂したものとされる。

その後、長い間にわたり本格的な本草書が編纂されることはなかった(少なくとも、『本草和名』以降に編纂されたと推定される本草書の

写本等の伝存の事実は明らかとなっていない。) <sup>7</sup>。

それから時代をずっと下って徳川将軍家の江戸時代となり、明朝の李時珍により『本草綱目』が南京で刊行されると (1596)、これが日本国にも輸入され、広く読まれるに至った。江戸幕府第 8 代将軍・徳川吉宗 (1684~1751) は、本草や薬方に関する研究を深めることに精力を注ぎ<sup>8</sup>、民間で栽培能力のある者には、徳川家が育成している薬草の苗を下賜し、その栽培を委託・奨励し、各種薬草の品種改良に努めた。このような時代状況を背景にして、森野藤助 (賽郭) 『松山本草』 (1750~1768) が編纂された<sup>9</sup>。

森野藤助は、薬草の栽培と写生に関しては比類なき才能を示したが、本草学者ではなかったため、当時の本草学者らと交流を深め、『大和本草』等の本草書を読み、それによって本草に関する知識を習得したのだという<sup>10</sup>。

「益軒」を号とした貝原篤信 (1630~1714・以下「貝原益軒」という。) は、武士 (筑後国福岡藩士) であり、藩費によって京都に留学して本草学や朱子学を学び、その際に、木下順庵 (儒学者) <sup>11</sup>、山崎闇斎 (朱子学者) <sup>12</sup>、向井元升 (本草学者) <sup>13</sup>、黒川道祐 (医者) <sup>14</sup>らとの交流を深めたという<sup>15</sup>。貝原益軒は、留学を終えて福岡藩に戻って以降、藩命により『黒田家譜』 (1688) 及び『筑前国続風土記』 (1709) を編纂

した。そして、江戸期の本草書として名高い『大和本草』（1709）を編纂・刊行したほか、『花譜』（1698）、『菜譜』（1704）、『養生訓』（1712）、『大和俗訓』（1708）、『和俗童子訓』（1710）等の膨大な量の書物を著した<sup>16</sup>。

『大和本草』<sup>17</sup>は、『本草綱目』における本草の分類体系を踏襲しつつも、単なる翻訳書ではなく、日本国にある植物、動物、鉱物等を『本草綱目』にある動植物等と対比し、同定しながらまとめられたもので、その中には1362種もの本草が収録されているとされる。収録されている本草の中には、現代の植物分類学上ではラン科に属する植物も多数含まれている。

本稿では、その中から主として「石斛」に焦点を絞り、その内容を紹介し、問題点を指摘したいと思う。

## 2 『大和本草』にある石斛の記述

『大和本草』では、「石斛」は、巻七・園艸類に収録されている。

他方、『本草綱目』では、植物である本草について「草之部」、「穀之部」、「菜之部」、「果之部」及び「木之部」の分類を設け、更に、「草之部」を「山草類」、「薬草類」、「芳草類」、「湿草類」、「毒草類」、「蔓草類」、「水草類」、「石草類」、「苔類」、「雑草類」に細分類している。「石

斛」は、「草之部」中の「石草類」に収録されている。これは、『神農本草教』以来の中国の伝統的な分類概念に基づくものと思われる<sup>18</sup>。



『本草綱目』附図にある「石斛」(李 建中)<sup>19</sup>

ところが、『本草綱目』における植物分類の中には、「園艸類」はない。「園艸(園草)」とは、現代の用語で言えば観賞用栽培植物という意味をもつ言葉で、自ら園芸植物を栽培し観察していた貝原益軒独特

の分類ではなかろうか<sup>20</sup>。

それはさておき、『大和本草』にある「石斛」に関する記述の本文は漢文で書かれており、「本艸石草類有之 曰如竹而節間生葉 開紅花節上 自生根鬚折下 以砂石栽之 或以物盛桂屋下 頻澆以水 經年不死」とある。

この文を意識すると、『本草綱目』<sup>21</sup>では石草類の中にこの草がある、「李時珍が言うには<sup>22</sup>、竹のようなもので、その節の間に葉が生え、節の上に紅色の花を咲かせる<sup>23</sup>」、「鬚根の生えているところから下を折り、これを砂石<sup>24</sup>に植えて栽培し<sup>25</sup>」、「あるいは、水草<sup>26</sup>を盛ったものを用いて軒下に吊して栽培し」、「萎れたものをピンとした状態に戻すためには水を用い<sup>27</sup>」、「年を越しても死なない<sup>28</sup>」となる<sup>29</sup>。

『本草綱目』には「石斛」の説明として、「時珍曰 石斛叢生石上 其根糾結甚繁乾則白軟 其莖葉生皆青色乾則黄色 開紅花節上自 生根鬚 人亦折下以砂石栽之或以物盛挂屋下 頻澆以水 經年不」とある。この文と『大和本草』にある「石斛」の文とは酷似している。

### 3 貝原益軒は石斛の花を見たのか？

貝原益軒は、実際には、石斛の花を見ていなかった可能性が高い。このことは、貝原益軒の著書『花譜』<sup>30</sup>の記載によっても証明可能では

ないかと思われる。

『花譜』の上巻には、花を觀賞する植物の一覧があり、開花の月別に記載されている<sup>31</sup>。そこで、『花譜』の上巻にある植物名の中からラン科植物と推定されるものだけを抜き出し列挙してみると、次のとおりとなる。

3月 白及（シラン）<sup>32</sup>、鰻根（エビネ）

4月 なし

5月 なし

6月 風蘭（フウラン）<sup>33</sup>

7月 蘭（シュンラン属）<sup>34</sup>

8月 獨頭蘭（不明）<sup>35</sup>

他方、『花譜』の上巻には、花ではなく草姿を楽しむべき植物の一覧もあり、その中に「石斛」がある<sup>36</sup>。石斛が開花していれば、独特の芳香を放ったはずなので、花を楽しむ植物の一覧にも記載されたはずだと考えるのだが、それがいないところから推測すると、貝原益軒は花を見ていないのではないかと思われる。『花譜』の下巻にある解説を読んでも納得できない<sup>37</sup>。

なお、『大和本草』の附図を見ると、ラン科植物ではクマガイソウ（敦

盛)、キンラン (黄山蘭)、シラン (白及) 及びエビネ (エビ子) の開花  
図はあるが、石斛の図はない。

#### 4 まとめ

『大和本草』が日本国の本草学の歴史の上で非常に大きな価値を有する書物だということは否定しようがない。しかし、仔細に検討すると、随所に疑問が生じてくる。

ラン科植物については、そもそも現代でもよくわからないことが多々あり、現行の植物図鑑中にも顕著な誤りを発見することができることが珍しくないので、江戸時代に輸入品の『本草綱目』しかない状態で編纂された書物に対して高度な正確性を求めることはできない。

けれども、有名な本草書だからといって、そこに書かれていることを全部鵜呑みにすることは危険なことだと思う。常に丁寧に読みこみ批判的に解釈・理解することが肝要だと信ずる。

以上

---

<sup>1</sup> 『輔仁本草』とも呼ばれる。

<sup>2</sup> 「少名彦薬根」と読める。

<sup>3</sup> 「岩薬」と読める。

<sup>4</sup> 深根氏は、本姓を「蜂田薬師 (はちたのくすし)」といい、代々天皇家に仕え、仁明天皇の承和元年 (西暦 834 年) に深根宿禰の姓を賜ったという。

<sup>5</sup> 中国の本草書の概要については、夏井高人「中国古典文献にみえる石斛の産地」やまくさ 64 号 137~177 頁で詳しく述べた。日本の仁和寺 (京都府京

---

都市右京区御室)に『新修本草』の写本がある。『新修本草』の写本等は完全なものではないので、その復元作業が続けられてきた。この点については、岩本篤志「敦煌本『新修本草』の校注初稿」資料学研究4巻99～125頁が詳しい。

<sup>6</sup> 和氣清麻呂の長男とされる。平城天皇の代である大同元年(西暦806年)、正五位下・左中弁に叙任された。『大同類聚方』を含め、植物の薬方を考える上で非常に重要な書物の多くがこの時期に集中して編纂されたという事実は、極めて興味深い。

<sup>7</sup> 宗田 一「幕府典薬頭の手記に見える本草—今大路親頭『商山年譜』を中心に—」・山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界(上)』(思文閣出版、1995)105頁によると、平安時代以降には、和氣氏と丹波氏(後代には丹波氏の小森家と錦小路家)が交代で朝廷の典薬寮の職を担当していたとのことである。大同年間までは典薬に勢力を有していた和氣氏が廃され丹波氏の独占状態が生じたことが、その後においける薬の神(少彦名神など)の解釈・位置づけとの関連でかなり大きな影響を及ぼしているのではないかと推定される。

<sup>8</sup> 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界(下)』(思文閣出版、1995)3～139頁

<sup>9</sup> 『松山本草』に収録されているラン科植物の図「らん・ゆり(東京山草会ラン・ユリ部会ニュース)442号8～14頁

<sup>10</sup> 高橋京子『森野藤助賽郭真写「松山本草」—森野旧薬園から学ぶ生物多様性の原点と実践』(大阪大学出版会・2014)1～4頁

<sup>11</sup> 著名な弟子の一人に新井白石がいる。

<sup>12</sup> 垂加神道の創始者。神仏習合を嫌い、その理論の純粋さから、幕末における尊皇攘夷主義や明治維新における廃仏毀釈運動の理論的基礎を提供する結果となったとされる。

<sup>13</sup> 著書に『庖厨備用倭名本草』(1671)がある。

<sup>14</sup> 著書に『本朝医考』(1663)がある。

<sup>15</sup> 白井光太郎校註『考註大和本草(第一冊)』(有明書房、初版1932・再刊1975)の巻頭には、貝原好古編撰「益軒先生年譜」が収録され、また、それに続いて、白井光太郎「博物學者トシテノ貝原益軒」が収録されている。これらによって、貝原益軒の生涯と業績の概要を知ることができる。

<sup>16</sup> 貝原益軒の養子である貝原好古は、『筑前国続風土記』の編纂を手伝ったとされるほか、『和爾雅』(1694)を編纂・刊行した。『和爾雅』は、貝原益軒の監修によるものだという。

<sup>17</sup> 原題は『大倭本草』となっている。本稿では、便宜、『大和本草』と表記する。

<sup>18</sup> 小野蘭山『本草綱目啓蒙』(1805)においても、「石斛」は、「草之部」の「石



草類」に収録されており、「園草（園艸）」という分類はない。

<sup>19</sup> 国立国会図書館所蔵の版本に収録されている図（部分）。図が極めて不正確なものではないかと推定されるが、葉が対生のものとして描かれていることに注目したい。

<sup>20</sup> 直海衡齋選『廣大倭本草』（1715）第三巻には「園草部」がある。

<sup>21</sup> 原文で「本艸」とあるのは、『本草綱目』のことを指す。

<sup>22</sup> 原文の「曰」に主語はないけれども、文脈から、李時珍のことを指すことが明らかだと思われる。

<sup>23</sup> 『本草綱目』にも「紅色」とある。しかし、江戸時代において実際に石斛を写生して描かれたと推定可能な絵図や刷り物等をみると、紅色の花を咲かせる石斛の図は存在しない。他の本草書等の記載と比較してみても、日本で観察された石斛の花は、白色を基本とし、稀に淡い桃色を呈するものがある程度となっている。『長生草』にある「紅雀」は例外だが、そもそも日本の自生種ではなく、南京あたりから輸入された交配品種の可能性が高い。また、刷りものの版によって著しく濃い紅色を呈するものがあるけれども、初版ではそれほど濃い紅色にはなっていないので、要するに、刷り方の影響を植えているものがあるということに留意しなければならない。これらの点については、前掲「中国古典文献にみえる石斛の産地」でも触れた。推定としては、李時珍が生きた明代では、非常に多くの石斛類が発見され流通していたと思われ、その中でも「高貴石斛（*Dendrobium nobile*）は、育てやすく、大型で、花も美しく、紅色の大きな花を咲かせることから（ただし、白色品種もある。）、この高貴石斛を想定して『本草綱目』の「石斛」が描かれているのではないかと思う。しかし、日本には高貴石斛が存在しない。貝原益軒が石斛の花の実物を観察しないまま単純に書写し組み入れた可能性が高い。

<sup>24</sup> 冉 懋雄主編『石斛（名貴中薬材緑色栽培技術）』（科学技術文献出版社、2002）78～80 頁によれば、現代の中国においては、岩や石を用いて石斛を栽培する方法として、石斛の茎を、岩、石、樹木等にケト土のような粘土質の土で張り付け、あとは自然に任せるといった方法が採用されているようだ。『本草綱目』では、単に「石」とあるのではなく「砂石」とあるので、明代においては、現在の中国における栽培方法よりもかなり繊細で丁寧な栽培方法が存在していたのではないかと推測される。

<sup>25</sup> 「砂石」で栽培する方法は、現代でも「砂植え」として知られている。しかし、この部分の記載は『本草綱目』にあるとおりのものをそのまま引き写しているだけではないかと思われる。砂植えの場合、実際には砂や石を用いるのではなく、栽培用に特殊な配合をした土砂等を用いる場合が多く、また、細かく砕いた石材等を用いる場合には、着生蘭の栽培についてかなり熟達した知識・経験に基づいてそれを応用・実施するのでないと、栄養及び水分の過度の不足により枯れ死してしまうことがある。

<sup>26</sup> 「桂」は、樹木のカツラを指すのではなく、水草である菴の類を意味すると

---

考えられる。ただし、ここでいう葦の類とは、ヨシのことを指すのではなく、ミズゴケのような植物を意味していると推定される。現在では、ミズゴケで巻いた上で素焼鉢に植えて栽培するのが普通だが、乾燥した水草の類で巻き、ほぐれないよう縛った状態で日蔭に吊るして栽培する方法や苔玉を用いた栽培方法等が古くから行われてきた。

<sup>27</sup> 生薬（中薬）としての石斛は、通常、茎を乾燥して丸めた状態で販売されており、これを処方する場合には、そのまま湯で戻して汁を用いるか、または、乾燥茎を磨り潰して粉末とした上で、白湯で煎じて飲用する。しかし、ここで書かれていることは、石斛が磐上や樹幹に着生し、乾燥に非常に強い植物であることから、一見枯れ死したように見える状態であっても水をやると元気を取り戻して復活するというを示しているのではないかと推定する。おそらく、貝原益軒は、その意味を正確にとることができず、『本草綱目』に書かれているとおりに引用したものと思われる。このことは、実際には、貝原益軒が石斛を栽培できなかったという事実を示唆している。

<sup>28</sup> 多年草であることを示す。

<sup>29</sup> 『花譜』の下巻には貝原益軒の解釈が示されている。すなわち、「節の上に根を生ず。おりて砂土にうふれば、つく。或器物にもりてのきの下にかけ、ときどき水を灌ぐべし。年を経ても枯れず、石の上にもあつまり生ず」とある。

<sup>30</sup> 中村学園大学のアーカイブサイトで読むことができる。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/library/kaibara/archive02/> [2014年7月26日確認]

<sup>31</sup> 太陰暦と思われ、しかも、明治政府によって強制的に暦が修正されるはるか以前の時代のことなので、約1か月近くの誤差がある記述と推定される（明治5年12月2日の翌日は、同年12月3日から同月31日までが存在しないものとして直ちに明治6年1月1日となると改められた。その結果、明治5年は1年で336日しかない。）。現在の通常の開花時期と少しずれているものがあるのは、そのためだと思われる。

<sup>32</sup> 『花譜』の中巻には「白芨（しらん）」の詳細な説明があり、「紫蘭」のことだとしている。白花品は、「白蘭」と呼ぶとある。これとは別に「蕙」というものがあると書いてある。「蕙蘭」のことを指すとすれば、シンビジウム属のラン科植物のことになる。

<sup>33</sup> 『花譜』の中巻には「風蘭」の詳細な説明があり、小かごに入れて樹上にかけておくと記載されている。ここに記載されている「風蘭」なるものが本当にフウラン (*Neofinetia falcata* (*Vanda falcata* として分類する見解もある。)) なのかどうかについてはかなり疑問があり、もしかすると石斛の類かもしれない。しかし、完全に検証することができない。

<sup>34</sup> 『花譜』の下巻には「蘭」の詳細な説明があり、古来「蘭草」と呼ばれてきたフジバカマの類ではないと明記してある。「大蘭」、「中蘭」、「小蘭」及び「青茎」の4種があり、全て盆に植えて鑑賞するものとのことなので、シュンラン属のラン科植物を指すと思われる。「大蘭」は、シャガと同じくらい広い葉をして

おり、春に花が咲くことから「春蘭」と呼ばれていると書いてあるから、そのとおりだとすれば、シュンラン (*Cymbidium goeringii*) またはハウサイラン

(*Cymbidium sinense*) ではないかと思われる。「大蘭」は、元は「王蘭」だったかもしれないが、「報蘭」がなまったものだとすればハウサイランとなる。「中蘭」は最も広く愛好されている蘭だと書いてある。実は、この中蘭こそがシュンラン (*Cymbidium goeringii*) に該当するのではないかと思う。現在一般的に用いられている「春蘭 (しゅんらん)」との名は「中蘭 (チュンラン)」がなまったものかもしれない。「小蘭」にはコラン (*Cymbidium koran*) だと思われる。元は「胡蘭」だったかもしれない。「青莖」には2種あり、一方は葉が直立し香りが最も良いと書いてある。カンラン (*Cymbidium kanran*) ではないかと思われる。他方は、葉が直立せず、横にたわんで倒れ、香りが少し劣ると書いてある。断定はできないが、スルガラン (*Cymbidium ensifolium*) の可能性がある。これら全部の種類について、寒さに弱いと書いてあるので、おそらく、いずれも中国から渡来した植物なのではないかと思う。

<sup>35</sup> 「ホクリ」とフリガナがある。しかし、シュンラン (*Cymbidium goeringii*) は3月～5月の春に開花する植物なのに『花譜』の上巻には8月とあり、秋の植物として記載されていることになる。また、シンビジウム属のラン科植物については、別に「蘭」として記載がある。『花譜』の下巻には「獨頭蘭」のやや詳細な説明があり、「山に生ず。花葉ともに蘭に似て、少し香りあり。山人根をあぶり、くだきて、のりのごとくして、手足の軋をふさぐ」と書いてある。植物名の同定に誤りがある可能性は否定できないから、「獨頭」との名の文面上での意義を無視すると、サイハイラン (*Cremastra appendiculata*) のことを指しているようにも読める。

<sup>36</sup> 栽培品なのか野生種なのかはわからない。草姿を楽しむ植物として記載されているところからすると、仮に栽培品であるとすれば、盆栽植えのシノブのようにして楽しんでいた可能性はある。しかし、現存する資料からは推定不可能。

<sup>37</sup> 前述のとおり、『花譜』の下巻には詳細な説明があるが、「本草曰、五月に苗を生じ、七月花をひらく。十月に実をむすぶ」と書いてあるので、実際に花を見たのではなく、『本草綱目』を書写し、自分の解釈に基づく読み下し文を記したと考えるのが正しいと思われる。『本草綱目』には積義として「頌曰、「五月生苗 莖似小竹節 節間出碎葉」、「七月開花 十月結実」とある。ここで「石斛」として示されている植物の外形的形質上の特徴は、明らかに日本で普通にセッコク (*Dendrobium moniliforme*) として認識されている植物の特徴と異なる。日本でセッコク (*Dendrobium moniliforme*) だと認識されている植物では、一般に、5月ころに開花し、開花後に莖の根本から新芽を出し(ときとして莖の上部の節などから高芽を出すこともある。)、開花時にうまく受粉していれば7月にはその果実(さく果)が大きくなっている。したがって、貝原益軒は、単に文献上で「石斛」なる植物を知っていたのに過ぎず、実際には石斛を全く栽培していなかったという可能性も出てくる。